

東京展美術協会 創立 50 周年記念誌

東京展美術協会（旧東京展市民会議）は 1974 年 11 月に 50 余名の画家が結集し、
『都立新美術館問題対策協議会』を結成したところに源流を持っています。

翌 1975 年に『東京展準備委員会』が発足。

既成の公募団体に内包するヒエラルキーを廃絶し、同志の連携による公募審査制の
団体展を標榜して現在に至っています。

世界に純粋な表現を発信すべく、未来を見据えて邁進して参ります。

50周年を迎えて



1975年11月に、第一回「美術の祭典東京展」は、新東京都美術館で開催された。

新時代の可能性を探るべく、鮮烈なデビューとなった。それは、既存の団体展の枠を超え、個々の作品が多様性に満ち、アクティビティをもった自由な表現の場であった。

会の中心であった中村正義の言葉を借りると「東京展の運動は不公平是正という、人間の最も根源的な素朴な理念のもとに、結集した作家が主体となって発生したと言って良い」（第1回東京展パンフレットより）とある。端的に言い表された中に、今日まで続いている東京展の骨格と深い思想がある。これは表現の自由と発表の自由を求め、決して権威主義に屈することのない創造の場を求める理念として、継承されている。

翻ってみると、50周年を迎えられるのは、この時代に困難を乗り越え、格闘された先達の尽力によるものが大きい。それは、今日に至るそれぞれの時代に、会の運営に関わった運営委員、会員の方々、諸先輩も然りである。心から敬服するしだいである。

さて、この度の50周年記念展は過去、現在、未来と続く東京展史の節目として重要な事業であると認識している。内容は記念展（歴史展示・先達展）と記念誌の発行である。今回50年を経た今、故人となられた方が多い中で、作品の借り受けや資料を揃えることは、難しさがあつた。そして、なによりも危惧されたのは厳しい予算での事業の達成であった。

しかし、多くの困難を突破して、50周年記念展の事業は完遂できた。これは、以下に述べる皆さまの暖かい支援の賜物による。作品、資料等に付いては、記念展の趣旨を理解いただき、諸先生方、故人のご家族の方、美術館、画廊、会員のご協力を得られた。また予算に付いては、会員・委員をはじめ一般の方々、個人、各企業、画廊等の皆様からの心温まる多大な寄付を頂いたことで解決された。深く感謝申し上げたい。次に特筆したいのは、この事業を担当した東京展50周年記念プロジェクト会議の皆様である。会員と委員とで編成されたチームは、実に粘り強く多くの仕事をこなした。その労を犒いたい。

おわりに、創立の理念を改めてかみしめ、皆様と共に東京展の一層の発展に努めて行きたいと願うしだいである。

東京展美術協会運営委員長 高倉和郎

東京展美術協会 50 周年記念誌 目次

50 周年を迎えて	東京展美術協会委員長 高倉 和郎	3
50 周年に寄せて		
東京展と時代精神	赤津 侃 (美術評論家)	6
東京展 50 回を巡り思う事ども	瀧 悌三 (美術評論家)	7
東京展創立前夜の頃	清水 康友 (美術評論家)	8
東京展を支えた岡本太郎の批判精神	勅使河原 純 (美術評論家)	9
『東京展 50 周年』に寄せて	江口 健 (平成国際大学附属サトエ美術館 学芸員)	10
祝 第 50 回東京展によせて	此木 三紅大 (画家・青枢会代表顧問)	11
日本美術 (戦後) の流れの中での東京展の歩み	福井 昭雄 (運営委員)	12
東京展 50 周年記念によせて	武藤 順子 (運営委員)	13
関西展の経緯と東京展への提言	井上 利哉 (参与)	14
私的東京展見聞録	村岡 千穂 (元運営委員長)	15
私が見た東京展	齋藤 鐵心 (前運営委員長)	16
東京展に参加して	青柳 芳夫 (元運営委員長)	17
東京展クロニクル — 50 年史 十の物語 (田所一紘 編集)		
I — 黎明から初回展の喧騒へ—		20
II — 分裂から迷走、そして再構成へ—		21
III — 顕彰故展が定着—		22
IV — ミスター東京展・深尾庄介—		23
V — 幾何学抽象の時代—		24
VI — シンポジウムの時代—		25
VII — 都美術館休館にともなう外部展開—		26
VIII — 新装都美術館での開催とインフラの充実—		27
IX — 中村正義企画展からパンデミックまで—		28
X — 合議制による混乱・展覧会内容の充実—		29
東京展を築いた先達作家たち		
中村 正義 — 父の記憶—	中村 倫子	32
岡本 太郎 — 「東京都」と岡本太郎—	笹岡 勇	33
深尾 庄介 — 深尾先生の思い出—	中川 むつみ 田所一紘	34
田代 光 (素魁) 田代先生の思い出	平山 延子	35
小松崎 茂 小松崎先生の思い出	武藤 順子 井上 千鶴 中川 むつみ	36
油野 誠一 色彩の海原を自由にたゆたう画家、絵本作家 加賀美 裕子		37
濱野 彰親 濱野先生の思い出	中川 むつみ	38
増井 和弘 増井先生の思い出	齋藤 鐵心	39
鹿児島 一平 眼光鋭き、優しいアーティスト	田所 一紘	40
杉田 五郎 アトリエクロー「ゴロゴロ方式」	結城 貴代子	41
鶴澤 文次郎 颯爽とした文人画家	田所 一紘	42
原 弘 原弘氏奥様へのインタビュー	高倉 和郎	43
守屋 直之 守屋直行先生 顕彰展のため	今井 伸治	44

50周年記念座談会	45
I 歴史を語る	(井上千鶴・織田泰児F・高倉和郎・多久薫 ・津田のぼる・中川むつみ・平山延子・武藤順子)	46
II 未来を語る —その1—	(財前みつこ・塩沢かれん・塚原克孝・山下晃伸)	50
III 未来を語る —その2—	(明輪勇作・石塚亨・加賀美裕子・田代りえ子)	54
絵本の部屋の歴史	59
絵本の部屋のはじまり	59
絵本研究会について	70
紙芝居から絵本へ	74
4つの絵本サークル	75
まとめ	78
東京展コミックアートの歴史	79
会員ページ	私の好きなこの一点 そのエピソード	82
東京展の記憶	105
I 〈委員による特別寄稿〉	105
山口通三 (運営委員)		
武藤順子 (運営委員)		
齋藤鐵心 (参与)		
織田泰児 F (運営委員)		
田所一紘 (事務局長)		
II 〈委員による特別寄稿〉	107
山口通三 (運営委員)		
武藤順子 (運営委員)		
III 〈東京展第一回会報 (1975年) の中から数名の寄稿文を抜粋〉	107
中村正義の寄稿文—運動の根源を考える—		
岡本太郎の寄稿文		
井上長三郎の寄稿文		
針生一郎の寄稿文		
創刊号巻頭のことば (会報編集者の文章)		
木村東介の寄稿文		
寺山修司の寄稿文		
東京展目録の変遷	111
ポスターあれこれ・会報アレコレ	113
思い出の写真コーナー	115
広告	118
編集後記	124

東京展と時代精神

来年は東京展50周年ですね。おめでとうございます。私は1975年11月1日からの第一回展から見えています。深尾庄介さんにそれこそ初日に案内してもらいました。一回展は日展と会期が一緒。よくぶつけてきましたね。1500点もの作品が飾られ、77,117人の入場者で賑わいました。まず驚いたのは、多くのジャンルがあったことです。そして名前は知らないけれども充実した仕事をしている作家が数多くいました。天井棧敷の寺山修司や映画・アニメ上映、野外劇『釘』なんていうのもありました。そして岡本太郎の等身大の人形が仁王立ちしていて大きな話題となりました。

東京展の発端は『日展の権威主義を批判して、他の団体展を超える団体展を作るんだ。』という精神から始まっています。私も朝日新聞の硬派の週刊誌・朝日ジャーナル誌で東京展の記事を何度も書いていますが、メディアにも多く取り上げられ、『都民の展覧会にふさわしい』と評価されました。

2回展以降も数々の企画を立ち上げて新鮮な驚きを与えてくれました。ソ連亡命作家展、大韓民国今日の美術展、オランダ現代美術展など、印象に残っています。

他の団体展には著名作家の影響による『カラー』を感じますが、東京展にはそうしたものはなく、『主義主張』を感じます。

70年代当初はかなり政治的で直接的なものがありました。ストレートで鋭かった。しかし次第に『表現』の内側に取り入れられていったように思います。つまり言葉で直接訴えるようなものではなく、作品によって止揚（アウフヘーベン）されるようになりました。やはり美術作家は作品で語らないといけません。昔は原爆を対象にしたもの、反戦活動としてラジカルなものがありましたが、今は作家の内部に

赤津 侃（あかつ ただし）

1939年神奈川県生まれ。慶應義塾大学経済学部卒。美術評論家（元朝日新聞記者）

国際美術評論家連盟会員 三鷹市美術ギャラリー企画委員 青梅市立美術館運営委員会前委員長 新人発掘に努力し、美術館企画展、個展、グループ展に作家論、美術評論を多数執筆。専攻：現代美術、東ヨーロッパ美術、メキシコ美術

著書：『もう一つのヨーロッパ—東欧の美術と政治』 『版画の見方・買い方・推薦作家100人』

赤津 侃（美術評論家）

2023年1月30日 聞き手：田所一紘



沈潜して作品の内側からにじみ出るものになってきたようです。

未来の東京展に期待するものは、東京展の精神を継承して時代に合わせて表現を発展して行くことです。東京展は、出品を重ねることで権威を獲得していくような団体ではありませんが、個々人を大事にした、大人の発表の場でしょう。まず自分の表現を追究して下さい。そして『時代意識』がとても大切です。いつも言っているのですが、自分の生きている時代をどう捉えるかが大事です。時代は変わっても表現の基本は変わりません。描き方・方法論は変化しても、基本は普遍的です。アンテナを広く張って時代に敏感になって下さい。時代認識と深まる表現との相乗効果で作品が強くなっていくのです。

今の時代、新聞離れが言われていますが、新聞は8割くらい世相をカヴァーして伝えてくれています。いまがどんな時代かを伝えてくれます。若い人でも新聞を読みましょう。

50周年は良い機会です。歴史に学んで、みんな“東京展精神”を確認しあって次世代に継承して下さい。大いに期待しています。

東京展50回を巡り思う事ども

瀧 悌三 (美術評論家)

半世紀前、東京展第1回開催の1975年、当時日経紙美術記者だった私は、秋から本格に団体展評を開始していた。従って当然東京展の第1回展を取り上げるはずだが、東京展が対立する日展の評は書いても、東京展には全く触れなかった。東京展は、当時、騒がしく話題を世上に投げ、取り上げるには問題が多すぎたためである。

だが、その代わり、翌年1月5日、文化往来というコラムで、日展対東京展の在りようを、美術界の「新旧分極化現象」と題して、論評した。

日展と反日展の第1回東京展は、会期を長く重複し、新開設の東京都美術館を会場としていて、両者開催中、何か変事が偶発するのではないかと予想する向きもあったが、別段、何も起きず、大過なく過ぎた。

しかし、両者は、全く相容れない対極にある。日展は、具象に安住し、年間約100万近い観覧者を集める多数派であり、東京展は、団体展の在り方を土台から覆す前衛で、公衆参加を呼びかけるが、入場者10万に満たない少数派だ。多勢に無勢で、東京展は、分が悪いように見えるが、美術の優劣は説得力ある表現が、どれだけ長く生き続けるかで決まる。長い目で見れば、どうなるか知れたものではない。といった論じ方で東京展の未来に期待を寄せる口ぶりである。

しかし、それから半世紀、結果はどうか。やはり少数派前衛志向の東京展は、第1回の盛り上がりの維持は遂に困難というのが現実で、結果だと思われる。

でも、運命的に仕方あるまい。東京展推進の立役者中村正義が、第三回展始まる前に52歳で逝く。以来、なし崩し的に、傾き、ある処で、止まり、中間的位置に収まって、どうにか運営しているのが、現在の地点なのだろう、私はそのように想像的に推断している。

東京展は、始まりに照らすと、アンデパンダンで無階級、無賞の平等主義とみられるが、実際の運営を重ねると、一般、会員、参与、運営委員と、通例の団体



同様の階級が生じており、質の向上のため賞も設定して。現実と折れた合ったための慣行なのであろう。

また、諸分野数あっても、全体をリードする指導的役割が、絵画部門となっている事も、歴史的必然であったと私はみる。そこに人材が集り、作品のレベルも数も、そこに集中するため、そうなるしかない故である。

という事態を勘案すると、東京展の未来は、全体を担う形の絵画部の在りように掛かっていると思うが、前衛の姿勢で、東京展が発足しているため、前衛とされる抽象が自ずと量質共に勝って、長い事、絵画部の主流であった。だが21世紀に入ると、抽象も惰性のマンネリ化で色褪せ、かつて時代遅れで存在価値低いとされた写実が、新味帯び蘇生して来る。そのため東京展絵画部内の両者の関係は、数の上で依然抽象が多くても、質的にはそうとは言い切れず、伯仲に近づいている。

私には、そう映っているから、将来は、両者が正反と拮抗し、アウフヘーベンの合に達する事を期待しているが、現実はそのようなふうに移る事なく、双方迷いに迷い、模索状態を続ける事になろう。

でも、それでいいのである。先が見えず、あがくのが最も人間的、画家人生では、それが常態、宿命だろう。

科学は進歩する。しかし芸術に進歩はなじまない。行ったり来たり、必ずしも、時間軸と共に発展するとは限らないのだから。

瀧 悌三 (たき ていぞう)

1931年東京生まれ。東京大学文学部美術史学科卒。日本経済新聞社入社。文化部に勤務、編集委員として美術を担当、1992年退社。『二科70年史』の編纂など美術史の研究、さらに美術評論家として活動する。著書として『前田寛治』『一期は夢よ鴨居玲』『日本近代美術事件史』『ほんねはんぶん』『芸苑雑事記』『日本の洋画界七十年 画家と画商の物語』『濔標記』など。編纂・監修も多数。『美じょん新報』主筆。

東京展創立前夜の頃

清水 康友 (美術評論家)

本年「東京展」が50回を迎えた。1975年の第1回展当時学生で、歴史、美術史を学んでいた私は、当時の“もの派”や“概念芸術”等に少なからず関心を寄せており、大学から地下鉄で数駅の竹橋の近代美術館に毎週の様に出掛けていた。学生の特権で時間はたっぷり有り、美術館の他神田から日本橋、京橋、銀座の画廊を次々と見て歩いた。池袋のデパートに現代美術を中心とした西武美術館が開館したのもこの頃だったと思う。それから半世紀、時の経つ速さに驚かされる。

画廊も現在とは変わっており、佐谷画廊はまだ京橋にあった。そこから銀座の藍画廊、ルナミ画廊、みゆき画廊や養清堂、ヤマト画廊、サトウ画廊、シロタ画廊、資生堂から村松画廊、櫛画廊等を巡り、地球堂ギャラリーを経て新橋の第七画廊が終着点であった。今も同地で開業しているのは、養清堂と資生堂、シロタ位で、他は閉廊が移転している。中でも地球堂の田辺すずさんとそのご主人には大変可愛がってもらった。彼女の夫の田辺竹次氏は東京展にも参加した洋画家で、第15回東京展の顕彰故展に出品している。私は地球堂で若輩ながらも多くの美術家と親交し、その中には東京展で重要な役割を担った、山本政雄氏や深尾庄介氏、田代光氏等もいた。ある時画廊に評論家の針生一郎氏と何人かの画家が集まっており、やがてどこかへ出て行かれた。ママ(私達は地球堂の田辺さんをママと呼んでいた)が、「今度新しい展覧会が出来る様なので、皆でその相談をしているのよ。」と教えてくれた。その新しい展覧会が、東京展であるとその後知った。

東京展は新しく建った新東京都美術館で、日展と同じ会期での開催を発表し、新聞TVで大きく報じられた。それまで所謂“美術の秋”と言われた11月は、日展が都美術館を独占して開催していたが、



その慣例を崩したという事で大変な話題となったのだ。当時の東京展は反日展を明確に打ち出し、序列を無くし公平性を保つため、出品はアンデパンダン方式を採用した。つまり東京展は真向から日展と対抗する事となったのである。それ故私を含め多くの人が、美術界で何か大きな変革が起きるのではないかと思ったのである。

私が様々の画廊を見て廻っていた折り、年配の画家達が「俺達は日展の連中には負けたくないんだ」と言っていたのを時折り耳にした。それは半世紀近く前には、美術界・画壇の中心には日展が存在しており、多くの在野(今日ではあまり使われない言葉だが)の画家達は、少なからず対抗意識を持っていたという事だ。現在はその言葉を聞く事は全く無くなったが、これは今の日展の立ち位置を物語っている様に思われる。今現在100回を超える公募団体展は、日展を含め10団体近くある。その様な状況の中で、半世紀前に美術界に大きな衝撃を与えた東京展が、50回を迎える事となった、そこで若き日に目にした、東京展創設頃の美術界の一端を述べてみる事とした。

清水 康友 (しみず やすとも)

東京都出身 美術評論家 早稲田大学にて東洋史・東洋美術史を学ぶ 全国農業組合連合会 (JA) 委嘱美術コンサルタント 損保ジャパン奨励賞推薦委員 富山国際現代美術展シンポジウムメインパネリスト 淑徳大学エクステンションコース講師 市川市美術作品購入審査会会長等歴任

美術雑誌『月間美術』『月間ギャラリー』『書21』に連載

現在国際美術評論家連盟会員

東京展を支えた岡本太郎の批判精神

勅使河原 純 (美術評論家)

いまから半世紀近く前の1975年11月1日、「美術の祭典 東京展」は新装なった東京都美術館で、賑々しく開催された。そこに至るまでの経緯には、もちろん実にさまざまな事情が絡みあっていたことだろう。さらに大方の予想を上回る盛り上がりの根底には、当時の日本美術そのものが抱えこんでいた欲求不満、抵抗、そして何より社会への強い批判精神みたいなものが伏在していた節がある。私にはむしろ、それこそが東京展を可能にし、牽引していった本当の主演であったようにさえ思われるのだ。

当時大学は出たものの、自らの生き方さえ碌にみえていなかった27歳の私は、暗号のような謎めいた絵を描いておられ、それ故に追いかけも敬愛もしていた深尾庄介、大住閑子ご夫妻が、大作を引きずりながら必死になって東京都美術館へと突進していくお姿を後ろから見遣りつつ、これは大変なことになったとの感を深くしていたのである。

そうした臆げな心許ない記憶ながら、岡本太郎という当時ほとんどお目通りさえ叶わなかった大長老が、この出来事に際して果たした特筆すべき役割については、なぜか妙に鮮明であった。岡本太郎はもちろん並外れたアーティストであったが、ただ単に優れた絵描きということではない。その胸中から湧き出てくる日本アートへの危機感ゆえに、絶えず世間を騒がさずには措かない稀代のアジテーターとして、他に例をみないほど鋭い光彩を放っていたのである。これに匹敵するのは、恐らく5年まえに「クーデター・ハラキリ事件」を起こして自決していた、三島由紀夫のぐらいのものではなかったろうか。

岡本太郎には、当時の美術界がどうしても避けては通れない諸問題を、独りでまとめて引き受けてしまったようなところがある。それは、アーティスト



たち自身がそれぞれの分野で真新しい表現を開拓していくという、ごく当たり前の手順ではもはや果し得ない難題であった。すなわちアヴァンギャルドの中心地であった当時のパリで、伝統の美術が新しく勃興してきた民族学、宗教学、現代思想などの根底的な批判に晒され、どうしてもそれらのエッセンスを獲りこまねばならない羽目に陥ったところから始まる、一連の闘ぎ合いであった。そのため彼は一時的にしる、民族学・宗教学・哲学研究者へと転向さえしているのだ。マルセル・モースからは「芸術とは呪術である」と教えられ、ジョルジュ・バタイユからは「情熱のボイラーは爆発するだろう」と暗示にかけられ、ミルチャ・エリアーデからは「太陽の塔・生命の樹」へとつながる、憑依とイニシエーションの奥義を伝授されている。それらが次第にまとまり、岡本太郎自身の「今日の芸術はうまくあつてはいけない、きれいであつてはならない。ここちよくあつてはならない」というまるで縄文人が乗り移ったかのような言葉、すなわち現代社会への痛烈な批判として、純粹培養されていったのではなかったろうか。

勅使河原 純 (てしがわら じゅん)

1948年岐阜県生まれ。東北大学文学部美学美術史学科卒業。民間企業、地方自治体、文化系財団などに勤務したのち、世田谷美術館美術課長・事業部長、副館長を経て退職。以後美術評論家として活動。この間、川崎市立岡本太郎美術館の運営協議会長、三鷹市美術ギャラリーのアドバイザー等をつとめる。1995年著書『美術館からの逃走』で倫雅美術奨励賞、油絵「風方」で第22回シェル美術賞佳作賞を受賞する。

『東京展50周年』に寄せて

江口 健 (平成国際大学附属サトエ美術館 学芸員)

『東京展』が50周年を迎えることとなり、本当に喜ばしいことである。『日展』に対抗すべく中村正義を中心とする様々な分野の表現者たちが革新的にスタートしたのが『東京展』であり、当時における同時代の前衛表現がカオス的に凝縮されていたのが1975年の第1回展であったと認識している。権威的な既成の概念や範疇から変容を遂げるべく、飽くなき表現への情熱が会場には満ち溢れていたことであろう。

筆者と『東京展』との繋がり、(公財)サトエ記念21世紀美術館(現・平成国際大学附属サトエ美術館)の学芸員として青柳芳夫・ナツエ先生ご夫妻に企画展覧会を依頼した平成18年頃にはじまる。同展事務局長や運営委員長などを歴任された青柳芳夫先生は、同会の一層の隆盛と発展のためご尽力されており、筆者にも『東京展』の歴史的な背景や現状など様々についてご教示をいただいた。今後の展覧会に関しても、現在、事務局長を務められている田所一紘先生の発案により「コミックアート部門」を新設する計画を進めていることを伺い、他の団体展では追従できない企画力に同会の魅力を感じた。

また、(公財)サトエ記念21世紀美術館所蔵作品16点により構成された『顕彰故展 藤井 勉 ～愛娘を描いた肖像画を中心に～』を『東京展』にて開催していただいた。搬入日の前日に関東地方が台風の被害に見舞われ、開催自体が危ぶまれながら搬入・展示を行ったことも大変に思い出深い。藤井勉という『東京展』との縁がない作家でも分け隔て無く顕彰する同展の器量に感服するばかりである。



近年も『東京展 EYES ～銀座・新橋の画廊・個展探索』など、一層に発展させた企画を50周年に向けて開催しており、興味深い活動が続けられている。

伝統的な多くの公募団体においては若年層の出品や来場の減少が問題となって久しいが、『東京展』は唯一無二である「コミックアート部門」や「絵本部門」を中心に若者にも盛況のようだ。21世紀を迎えた頃から多くの価値観は変容し、「常識」という言葉も死語になるほどの多様性が社会的に強く求められ、YouTubeやTikTokなどSNSでの自己表現も確立しているのが現代である。第1回展で多様な芸術作品と表現を内包した『東京展』の精神性は半世紀を経た現在も連綿と受け継がれ、時代の体温を敏感に感じながら新たな表現の領域をも貪欲に巻き込みながら、更なる発展と進化を遂げようとしている。

江口 健 (えぐち けん)

1972年、神奈川県横浜市に生まれる。多摩美術大学芸術学部芸術学科卒。2001年より埼玉県加須市に新設された(公財)サトエ記念21世紀美術館(現・平成国際大学附属サトエ美術館)にて学芸員となり、同館の収蔵作品を中心とした展覧会の企画・運営を行い、斎藤与里・高田誠・小松崎邦雄・青柳芳夫などの企画展を開催。

祝 第50回東京展によせて

青枢会代表顧問 此木 三紅大

中村正義さんに呼ばれて、初めてご自宅に伺ったとき、アトリエの庭の中央で泰山木の若木の白い花が、風に揺れていました。

笑顔の爽やかな印象の、ひょろりと背の高い正義さんは、「色々お手伝ってもらいたくてね」と、描きかけの小品が散らばっている画室へ案内してくださいました。そして、身体の調子が悪かったのか、立ち膝で話し始めました。「从という言葉がある。それには〈始まる〉という意味もあって人は生まれながらに人と人が手を携えていくものなんだ。画家達にも差別の無い、公平で平等で自由な集まりの楽しい団体を作り、日本美術界の改革をしたいんだ。」と、穏やかな声でした。あの時の輝く目、魅力的な笑顔は、忘れられません。その頃、権威主義と学閥が横行する美術界に、辟易していた私には、救いの笑顔でした。そして気が付くと、東京展の準備委員に加わっていました。一年半の会議を経て、愈々、第一回の東京展開幕に漕ぎつけましたが、展示の当日、正義さんは身体の具合が思わしくなかった。さらに、共に改革を唱えていた或る評論家のドタキャンによって、差別の無い、自由で、公平で、平等で、という、理想の展示は脆くも崩れ去った。

会場の上階には、招待作家の作品が恭しく並び、一般作家の作品は、一階も地階も二段掛けという、あからさまな差別の展示が行われた。マスコミの中には、初の東京展は大成功との評価もありましたが、正義さんを慕って集まった画家たちの中には、自己顕示欲や嫉妬が生まれ、不平不満が燻ってしまったのでした。それでも、その後の数年間は、苦心惨憺



しながらも、東京展は華やかに立派にやり切ったと思います。正義さんは52歳という若さで、志半ばに亡くなってしまいました。正義さんの若すぎる死は、日本美術界の進むべき流れに、ブレーキをかけてしまったと思っています。

今、日本の美術界は、混沌として沈滞気味の感があります。寄せて来たあの日の波は引いてしまった。だが、波は再びうねり寄せ来るものと信じます。かつての公募展の活気を取り戻すべく、第50回東京展に集う画家たちは、中村正義さんや、井上長三郎氏や、笹岡勇氏ら、苦闘の戦士からのバトンを引き継いだ、草莽の士の集団でありましょう。無数の、個性豊かな綺羅星が東京展の大空に輝いています。50年もの昔に、正義さんのアトリエで見た、泰山木の白い花は、私の胸の中で、今でも清く揺れているのです。

此木 三紅大 (このき みくお)

1937年東京生まれ 武蔵野美術大学、ローマアカデミア美術大学卒業、1976年「青枢会」創立、1998年「松山庭園美術館」を設立、シェル美術賞佳作賞、国画会新人賞、芸術選奨新人賞・芸術選奨文部大臣賞に各ノミネート、青枢会大賞、文部大臣賞月間ギャラリー誌上「コノキミクオの本当のような嘘のような呟き」を連載中 青枢会代表顧問、日本ガラス絵作家協会会長

日本美術（戦後）の流れの中での東京展の歩み

運営委員 福井 昭雄



美術の祭典・東京展、第50周年記念展おめでとうございます。敗戦による戦後の美術は様々な様相を示してきたが、日展を中心とした公募展の影響力が強い一方、自由な作品を発表する場として、個展やグループ展が開催出来る街の画廊がブームとなった。中でも国際アートクラブの一環として発足した「日本アーティストアートクラブ」は岡本太郎、村井正誠、末松正樹、瀧口修造などによるものだが、1956年に「なびす画廊」で第1回展が開催され、以降「サトウ画廊」「村松画廊」など連鎖的に展覧され、会員や新人の作品が紹介された。同年11月に朝日新聞主催による「世界・今日の美術展」（日本橋高島屋）では国際アートクラブの形で協賛しており、会員60名が参加。中でもフォートリエ、マチュウ、タピエスなどのアンフォルメル作品が紹介され、美術界に衝撃を与えた。1957年の読売アンデパンダン展ではその影響が見られ、1960年には廃品による作品や、ハプニング的な要素のものが多くなり、1963年の第15回展で廃止となった。その後東京都美術館のあり方などを問題にしながら、中村正義は日展の会員を退会し自由な表現と自由な発表の場を求め、多くの賛同者を得て1975年に第1回東京展を開催することになった。現代美術の流れとアンデパンダンの精神が東京展に流れ込んでいた。小生は大学在学中にグループ活動を始め、東京銀座の画廊で作品発表したが、1958年に沢田重

隆、みのわ淳、田名綱敬一らの「グループ JUNE」に参加し活動した。1964年にアートクラブの会員となり、'65 - 日本・今日の美術展（村松画廊）に出品した。（アートクラブ画集 1956）東京展には第1回展（東京都美術館）に出品したが、会の運営に問題があり第2回展より出品せず、第20回展より再出品することになり、その後30年間続けて出品してきた。東京展は自由な精神と創作活動に満ち、先輩・後輩の隔たりもなく、それぞれの個性を発表出来る唯一の団体であり、これからの更なる飛躍を望む者として50周年記念展の成功をお祝い申し上げます。

福井 昭雄（ふくい あきお）

1932年東京生まれ 東京学芸大学美術科卒業 2002年文教大学教育学部教授定年退職 大学在学中より読売アンデパンダン展に出品 1957年サトウ画廊で第1回個展 1958年～グループ JUNE(沢田重隆、田名綱敬一、みのわ淳)に参加 1962年回国際青年美術家展 第5回現代日本美術展 1965年 アートクラブ日本 - 今日の美術展 - 第8回現代日本美術展 1976年アートユニオン - シンポジウムに参加 - 1983年個人的ルーツをさぐる展 1988年現代美術 120人展(埼玉県立近代美術館) 1989年～CAF展 1993年～地球を元気にするアート展(武蔵野市民文化会館) 1994年～美術の祭典・東京展(2004優秀賞、2012東京展賞) 1995年TAMAを元気にするアート展・TAMA現代美術家会議結成 2001～2012年羽村市生涯学習センターゆとろぎ 2002年～府中ビエンナーレ運動企画「接近展」(府中市美術館) 2012年原弘、福井昭雄、山田實BIGIN3人展(シロタ画廊) 2013年東京展賞受賞記念展・山口通三と2人展(ギャラリーGK) 2014年林紀一郎物書き半世紀を祝う仲間たち展(ギャラリー暁) 2015年 福井家四代展(かわべ美術・画廊楽) 2018年具象 VS 抽象(南牧村美術民俗資料館) その他個展等 日辰画廊、調布画廊、東邦アート、たましんギャラリー、かわべ画廊、アートスペース羅針盤など 東京展美術協会運営委員 日本美術家連盟会員

東京展 50 周年記念によせて

運営委員 武藤 順子

美術の祭典・東京展 50 周年、おめでとうございます。

月日の経つのは早く、光陰矢の如し、です。

1975 年 11 月、芸術のヒエラルキーをなくし、すべての権威主義と闘い、芸術の完全なる自由を宣言して、第一回の東京展がはじまりました。

東京展を立ち上げるには、大変な苦勞があったと思います。中村正義さんを中心に、新築オープンになる運営の在り方をめぐって、東京展市民会議が発足されました。都美術館と日展との交渉にたどりつくまでには、都庁で座り込みもした、と聞いています。

私は、第一回展は、傍観者でした。「なんて騒ぎの大きい展覧会でしょう。」全身に金粉を塗った男性（くも男）が建物の屋上から庭のいちょうの木の間に綱をはって渡る様子をテレビのニュースで見ました。

一回展は、2 千人もの出品者で盛会でした。二回展は、少々危ぶまれていました。

その第二回展から、私が参加することになるとは、夢にも思っておりませんでした。私は、その頃、手作り絵本がマスコミにのって、いろいろ取材を受けていました。それを見て絵本作家の田島征三さんが声をかけて下さいました。

「日の目を見ない作家にも展示の場所を」。そして他の展覧会と同じようにならないよう絵画や彫刻の他、絵本、イラスト、漫画、写真、映像など、異なるジャンルの人達も参加していました。

絵本の部屋の隣に、著名人の書が展示されていま



した。岡本太郎、今東光、永六輔ほか。

岡本太郎さんは、絵のような花、という字を書いていました。週刊誌が岡本太郎さんの絵の隣になぜか絵本があると、書き立てていました。とにかく東京展は、話題性のある企画をし、観客を動員したかったのです。

第 4 回展では、ソ連亡命作家展が企画され、大変ニュース性はあったのですが、その後赤字をかかえ、永い間経済的に苦勞しました。運営委員で経済的に余裕のある人が補填をし、画廊で小品展をして売上げをあてたりしました。

先駆者の努力、運営委員や会員の皆さんの並々ならぬ努力と協力で、紆余曲折をのりこえて、まずは安定した（？）展覧ができています。

とにかく私は 50 年もの間、都美術館の東京展に、絵本や絵画の発表の場をいただけたことを深く感謝しています。

これから先の 50 年、東京展がどう変遷して行くのか、見届けることは出来ませんが、これぞ芸術作品だと云える作品が、たくさん展示されるよう、東京展のますますの発展を祈ります。

武藤 順子（むとう じゅんこ）

1935 年山梨県北杜市に生まれる 国分寺在住

手づくり絵本を手がけて 52 年 第 2 回東京展に絵本の部屋新設 49 回参加

東京展第 31 回展に絵画「飛翔」を出品し優秀賞受賞

第 38 回展 地域おこしぐるぐるハウス賞受賞

2013 年～2019 年ぐるぐるハウス高柳で「武藤順子と絵本の仲間」展 7 回

第 48 回東京展賞受賞

日本児童出版美術家連盟会員 日本児童文学者協会会員

絵本の会会員 東京展美術協会運営委員

関西展の経緯と東京展への提言

東京展参与 井上 利哉

第50回記念東京展おめでとうございます。

私が友人の岩崎年勝氏に誘われて入会させていただいたのは、約30年前のこと。当時は会員の移動が多く、入退会がくり返されていました。

関西から毎年のように上京する私は、総会へ出席し、思い続け、発言し続けたのは、地方の人達へ東京展を知らせることでした。東京展自体、何であるか全く知らない人が多かったと思います。大阪にいる友人でもそうでした。

そこで私は他団体のように大阪にも支部らしいものを置くように、総会で発言したと思います。そして各地に支部ができることを願っていました。そうしているうちに支部ではないが、関西展として開催することを、齋藤委員長を中心に青柳氏、田所氏を始め、委員の方々の了承のもと決定したと思います。

関西展（原田の森ギャラリー）の運営に当たっては前川さん（事務担当）をはじめ、松下さん、石田さん、坂口さん、西浦さんらを中心に、関西出品者（約60名）、それに東京からの出品者のご協力により、毎年開催することができました。この事は、東京展発展の一助になったと考えています。残念ながら都合により2022年の第10回展が最終展となりました。又新たな陣容で発足するやに聞いています。

そこでこのページをお借りして、私が日頃考えている東京展への思い（提言）を思いつくまま書いてみました。参考になれば幸いです。

- 東京中心から、地方からの出品へ
- 他団体との交流
- 全国への知名度を広める作家の輩出



- 美術家連盟への加入（役員に選出）
- 美術雑誌への掲載（新美術新聞など）
- 会報の刷新（会員の声、主張・・・）
- 各新聞社の後援名義
- 東京展の巡回展（5年に1度とか）大阪・名古屋とか
- 評論家との付き合い
- 運営費（会費・チャリティー展・・・）

最後に私事ですが、5～6年前から体調をくずし、いつもご迷惑をおかけしている次第で申し訳なく思っています。実は持病の自律神経不安症をはじめ、神経痛に膝、腰痛、足のしびれ、物忘れなどで、悩まされています。従って東京展への出品も失礼しております。何とでも今年はと思っております。まとまりのない雑文ですがご容赦下さい。

東京展の益々の発展を祈って

井上 利哉（いのうえ としや）

1933年 大分県生 大分大学卒 美術教師として県内の公立中学校に就職。7年間勤務後、大阪市に転職。以後42年間公教育に従事。作品の制作に関しては、学生の頃から県展や学生展に出品。その後教職のかたわら全国公募展へ毎年出品（東光、春陽、二紀、安井賞、主体、二元、東京展等）。二元会（大阪天王寺美術館）に於いては創立会員として努力。しかし全国公募するには東京進出しかなく、大変な苦勞の結果、新都美術館設立にあわせて入館を果たした。以後二元会運営委員として会に尽くす。その後一身上の都合により退会。友人の紹介で東京展へ出品。現在東京展参与、日美連永久会員、泉南美術協会顧問、サロン・ド・トシヤン美術教室主宰。主な個展 銀座アートギャラリー、タカゲン画廊（2）井上画廊、阪神百貨店、丸善画廊、梅田白鳳画廊、ギャラリー香、等。欧遊、フランス、スペイン、イタリア、ベルギー。 師、仲町健吉、鈴木博導 現在大阪府泉南市在住

私的東京展見聞録

元運営委員長（2005～2011）村岡 千穂

私には、第1回東京展を観に行った遠い記憶がある。文系学部在学中に独学で油絵を始めて、まだ美術界の地図に疎かった私だが、なぜか興味を惹かれた。会場は1700点もの作品で溢れ、「アバンギャルドの坩堝」と化していたように追想する。

「東京展」は、人的ネットワークを介して、大きな運動体へと急激に膨張した稀有な存在である。当時は「美濃部革新都政」時代で、政治状況も有利に働いた。

ただ創立時には大いに話題を振りまいたものの、次第に内部矛盾が顕在化し、有力作家が次々と去っていった。第5回展から会員制度を導入、翌年には東京展賞創設と、「公募団体」の運営スタイルに近づいていく。

私は1980年から4年ほど自由美術展に出品していて、井上長三郎先生は東京展への参加を毎年呼びかけていらした。そのような経緯で、第9回東京展に初出品。第18回展からは、油野誠一先生の後押しで運営委員の列に加わった。当時は東上野の臨済宗寺院で委員会が開かれていた。まだ創立時からのメンバーも散見され、この時期の体験が後年の判断基準になったと同時に、発想に一定の枷をはめたようにも感ずる。

長く運営委員長を務められた深尾庄介先生は、晩年体調を崩され、会員総会を最高議決機関とする方式を提案された。今日に至る民主的な運営体制は、先生の遺産とも言えよう。

2001年2月の深尾先生の逝去を受け、薄井正彦運営委員長のもと、私が事務局長に就任する。薄井先生は、どちらかと言えば学者肌で、実務にも精通され、堅実な思考法で移行期間を無難に乗り切られた。



私は2005年に運営委員長に選出され、齋藤鐵心氏と6年間コンビを組むことになる。在任中は、現状維持優先の運営を心掛けたが、それでも懸案の図録刊行に漕ぎ着け、シンポジウムも毎年開催した。

2011年早春に委員長退任が決定。3月11日、肩の荷を下ろして、行きつけの中華屋で料理を待っていると、東日本大震災の激しい揺れが襲ってきた。後任の齋藤氏は、震災チャリティー展や関西進出など、立て続けに新機軸を打ち出し、会の名称変更の提案に至る。私が退任してから十余年、相次ぐ災害や疫病にも屈せず、創立50年を迎えられた事は、歴代委員長をはじめ各位の尽力と創意工夫の賜物と言えよう。

のちに東京展創立の立役者となる中村正義氏のエピソードを、最後に紹介したい。東博での「ゴッホ展」の帰りに羽黒洞に立ち寄った中村氏は、画商・木村東介氏に対して、「ゴッホはたいした事はありません、長谷川利行のほうがはるかに上です!」と言い放ち、二人は大いに共鳴したという。東京展が「常識を根本から疑う先達」によって創立されたことに思いを致し、今後も臆することなく前進してほしいと希うものである。

村岡 千穂（むらおか せんしゅう）

1949年東京都大田区雪谷に生まれる。本名・岩佐政明／早稲田大学第一政治経済学部経済学科を卒業／在学中に独学で油絵を始める／第一回日本表象美術協会展（日象展）で会友推挙。75年会員推挙。翌年退会／和光大学聴講生。荻太郎先生に洋画、斎藤寿一先生に版画を学ぶ／自由美術展（東京都美術館）に出品／東京展（第9回展）に初出品。以降85年（第11回展）まで出品／国画会展・版画部に出品（東京都美術館）／東京展（第15回展）～（第41回展）まで出品（東京都美術館）／神奈川国際版画アンデパンダン展委員／第18回展より東京展運営委員／東京展優秀賞受賞／東京展事務局長（一期）／東京展運営委員長（三期）／東京展賞受賞／東京展美術協会・退会／個展、グループ展多数／現在 無所属／神奈川県横浜市青葉区在住

私が見た東京展

前運営委員長 (2011～2017、2021～2023) 齋藤 鐵心

私の事務局長以前、事務局長、運営委員長時代を通して、マクロ的視点で東京展を見てみた。私が事務局長になる以前は、単発的な企画展は在ったが、定期的な会員展や受賞者展は無かった。規約も無かったし、受賞者への賞状も勿論無かった。無いはずしであった。そう云う会なのかも知れなかったが、新国立美術館が出来る以前の都美術館を利用している大美術団体で形成していた懇話会にも呼びは掛からない東京展であった。あの華々しい1975年の美術の祭典東京展の面影は無かった。外に発信する力は弱く、車座となり内向きで展覧会をやっていた。そしてあの都美術館改修後の各団体の格付けとも云える第1回目の都美術館使用審査があった。東京展は上から3番目のグループ。通知もらった時は愕然とした。1棟すべてを使用していた東京展にとっては考えてもみなかった結果だ。4棟連続平面使用は許可されたのだが、2週間の使用期間も1週間となった。しかし考えてみると、都美術館側の東京展に対する評価はさもありなんと云った感がある。先ずは、会報の充実、そして規約作成、会員展、受賞者展と出来る事は担当者の尽力で整備していった。反対していた委員もいたがカラー図録も作った。2週間の会期の出費が1週間の会期となり、運営資金という点では助かった面もある。そして第2回目の都美術館使用審査があって第2グループに昇格した。当時何処の団体もやっていなかったシンポジウムもやった。他の団体のやっかみ「なんで本江邦夫(美術史家、多摩美大教授・故人)が東京展に行くんだ？」もあった。そんなの無視した。赤津先生、本江先生を中心に毎年遂行した。それでも第2グループ?何が足りないのか、他の団体と比べ、無いものは、地方での持続可能な東京展の展覧



会を実行する事。つまり全国展開である。大きな美術団体でほぼ埋まっている地方美術館での開催は難しかったが、これもシンポと同じように個人の繋がりを探していった。新日本美術新聞の社主である松原清氏の知遇を得て、元兵庫県立近代美術館(原田の森ギャラリー)での開催が決まった。私が運営委員長になった初めの頃だ。半ばゴリ押しに近かったが遂行出来た。第1回目の美術の祭典・関西展では関西の会員は、皆熱気に溢れていた。東京展が2つの公立美術館という展覧会開催場所を持っている意義は大きく、都美術館側にも評価されたと思う。そして第3回目の都美術館使用審査があり、二回目同様東京展は2番目のグループ。現在第1グループに入るには至難の業だが、後は個々の作家のスキルアップにかかっている。会員展や受賞記念展はじめ色々な企画も充実しているが、その他でも持続可能な企画を東京展会員皆で実行して貰いたい。東京展が記念すべき第50回展を迎えた事は素晴らしい。今後とも出品者は皆大いなる自信を持って制作に励んでほしい。この50回展が、東京展の輝かしい未来への足がかりになるよう祈っている。

齋藤 鐵心 (さいとう てっしん)

1948年福島県生まれ、在独16年、'81ベルリン国立芸術大卒、同Meisterシューラー修了、'82カールホーファ財団給費試験合格、'87芸術家村ヴォルプスヴェーデ招待作家、'88デュッセルドルフ700年記念絵画賞第2席、'89.'90ベルリン芸術活動奨励者に選出、'90帰国、'94第5回リキテックスビエンナーレ奨励賞、'93東京展奨励賞、'95東京展賞、'99東京展25周年記念賞、'2008文化庁海外研修員(ベルリンに滞在)、'11-'17、'21-'23東京展運営委員長。

東京展に参加して

元運営委員長（2017～2021） 青柳 芳夫

1999年、個展のみで作品発表していた私が、初めて参加した団体展が東京展でした。

3年目に、事務局（書記）となり会と深く関わって行くことになりました。当時の東京展は抽象全盛で具象のわたしは強烈な違和感を持ちました。それでも参加し続けることができたのは、事務局になってしまったことと、会のフラットな雰囲気がかん地よかったことだったと、今思い出しています。その後20年近く、会の運営に関わってきました。順序は前後してしまうかも知れませんが、その間の重要と思われる事柄を記録として記します。

アナログからデジタルへ：山名和法氏と関根恵一氏によって、年間の東京展運営システムがデジタル化されました。少しずつ完成度を高め、今に至っています。これはイベントなどと違って表にはできませんが非常に重要な事でした。経費の大幅な削減と図録制作への足掛かりにもなりました。

会員展、受賞者展（2007～）：本展以外になんのイベントも持たない会にとって、会員の帰属意識と交流の場の必要性を感じて立ち上げました。会員展は宮下泉氏、受賞者展は青柳が担当。

図録の制作（2008～）：初めて出席した運営委員会（2001）で、私は東京展を広く認知させるには図録が必要と図録制作を提案しました。当時は目録があるだけでした。しかし反応は薄かったです。仕方なく、記録として残すために会員作品の写真撮影を認めてもらいました。山口通三氏と山崎仁氏の協力が大きかったです。6年後にようやく手作り低予算で図録制作は始まりました。東京展方式で図録を制作している団体は、ほかにはないと自負しています。

衝撃・屈辱：2010年から2年間、東京都美術



館は改修工事で休館。再開後、参加団体の再募集があり、美術館側は一方向的に団体の序列化を図ってきました。東京展は3番目の泡沫団体枠に入れられ、会期も半分に減らされました。予想もしていなかったため、運営委員会には衝撃が走りました。東京展の草創期の栄光を思えば、あまりの屈辱でした。当時、まだ書記でしたが、私はこれを好機と受けとめ、「東京展拡大計画（私案）」を委員会で提案しました。そして、他の公募団体とは全く異質の東京展を夢想し、その実現を心に秘めました。会にはその可能性が転がっていました。ポスターを変え、独自の企画を立ち上げました。その中心になったのが田所一紘氏です。講演会、企画展、新しいジャンルの募集、東京展は充実したものになって行きました。幾つかの地方展も生まれました。そして、5年後の再契約時には、募集ランク枠をひとつ上げることが出来ました。しかし、私の一貫した狙いはあくまでトップ枠昇格でした。オリジナルな価値観に立つ東京展を完成させ、美術館側をねじ伏せたい。

今、事務局を離れ、介護と制作の日々です。この50周年記念イベントに冷ややかなのは、少し方向が違うかなと思っているからかも知れません。まだ、ゴールしていないのに浮かれたくない。思いを果たしてから・・・。

青柳 芳夫（あおやぎ よしお）

1952年 栃木県真岡市生まれ／1979年 筑波大学芸術専門学群卒／1995年～個展多数（アートサロンこころ、ギャラリー・ヴィエント、ロイヤル美術館、サトエ記念21世紀美術館、グルグルハウス高柳など）／1999年～東京展出品（2000年優秀賞・2004年東京展賞）／2005年 損保ジャパン選抜奨励展出品／2011年 児玉敏郎と二人展（南牧村美術民族資料館・長野）／元東京展美術協会事務局長・元運営委員長

